

アフリカの想い出

アフリカは暑いか

和田 明範 陸自69

はじめに

陸上自衛隊から外務省に移籍し、約30年間在勤したが、その勤務はアフリカに始まり、アフリカで終わったと言える。

最初の勤務地はケニアのナイロビ（1979～82年）。最後はスーダンのハルツーム（2010～12年）。その他出張も含めると、アフリカ54カ国中、20カ国を訪れたことになる。

このため、アフリカへの想いは人一倍強く、退職後も様々な場で、アフリカについて話をさせていただいた。このような機会にいつも思うのは、日本人にとってアフリカは遠い存在であり、残念ながら、未だに誤ったイメージを抱いている人が多いということである。

アフリカに対する一般的な認識は、ギラギラと照りつける灼熱の太陽と猛暑、ライオンや象が草原を歩き回る野生動物の宝庫、鳴り響く太鼓と槍を持った裸の男たち、飢餓と難民、文明の果てる暗黒大陸といったところか。しかし本当にそうであろうか。

アフリカは暑いか

アフリカは、どこに行っても暑いと思っておられる人が多いようだ。確かに、赤道付近で海岸沿いの地域や砂漠気候に属する地域は暑く、最終勤務地スーダンのハルツームは40度を超える猛暑が続く。しかし、アフリカの多くの地域は思ったほど暑くはない。

例えば、ケニアの首都ナイロビは、ほぼ赤道直下にあるにもかかわらず、標高約1800mに位置し、日中は涼しい。朝晩は寒く、暖房を必要とするが、年間を通じて過ごしやすい日が多い。同様に、ウガンダ、ザンビア、ジンバブエ等の首都も高地にあり、気候は快適。植民地時代、当時の宗主国は気候の良い所に植民地経営の基盤を築き、これらが現在の首都になっている所が少なくない。

いずれにせよ、アフリカは南北8000km、東西7400kmと広大な大陸で、その気候も変化に富んでおり、暑い所もあるが、それほど暑くない所も多いのが実態である。

アフリカは野生動物の宝庫か

アフリカには、いたるところに多数の野生動物が生息していると思われがちだが、決してそのようなことはない。現状は大きく異なる。

例えば、百獣の王ライオンは、世界

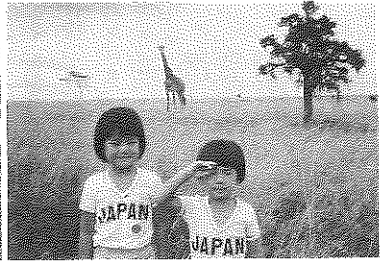
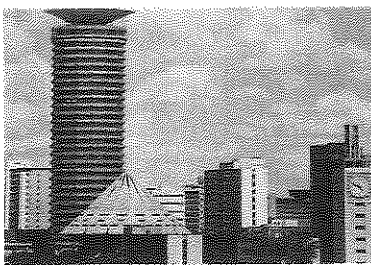
自然保護基金(WWF)によれば、半世紀前までアフリカに50万頭いたが、現在は2万頭。アフリカ象は500万頭が35万頭にまで減少。サイやゴリラに至っては絶滅の危機にあると言われている。

例外もあるが、一般的に人気のある野生動物は減少、ないしは絶滅の危機に直面している。原因としては、①密猟等による乱獲、②開発や森林伐採による生息地域の減少、③気候変動等による生態系の変化があげられる。

1973年、野性動物の保護を目的とする国際条約(ワシントン条約)が制定されたが、現在も密猟や違法取引は跡を絶たず、問題は深刻化しつつある。私事ながら、ケニア在勤間、家族や出張者を連れて度々、野生動物見物(サファリ)に出かけたが、3年間でライオンや象を見たのは、夫々僅かに3回。もちろん、シマウマやキリン等、比較的に見やすいものもいるが、広大なアフリカ大陸に生息し、えさや水を求めて自由に移動する野生動物に遭遇するのは、至難の業である。アフリカは決して野生動物の宝庫ではない。

アフリカは文明の遅れた暗黒大陸か

文化・文明論に言及するつもりはない。しかし、一般的に、アフリカは文明の遅れた、未開の国が多いとの印象



を持たれているのではないだろうか。

確かに、アフリカには手つかずの広大な密林、草原や砂漠が残っているのは事実である。しかし、いずれの国でも、その首都はヨーロッパの諸都市と比較しても遜色のない素晴らしい所が少なくない。最初の海外赴任地ケニアの首都ナイロビは、宇宙都市に紛れ込んだのかと錯覚するような超モダンでカラフルな高層ビルが建ち並ぶ一方、英国風の重厚な石造りの建物も多く、その素晴らしさに感銘を受けたことを鮮明に覚えている。

話は変わるが、アフリカ人は宗教心が厚く、キリスト教かイスラム教の熱心な信者が多い。ナイロビでは、日曜日の朝ともなれば、ケニア人の多くが正装し、家族そろって教会に出かけるのが日常的な光景である。敬虔なキリスト教徒から見れば、日曜日ともなれば、ゴルフ場に繰り出す日本人は、何て野蛮な人たちと思われていたのではないかと危惧する。

文化と直接関係ないが、アフリカの言語についても言及したい。アフリカ各国は、旧宗主国の言葉（英語、フランス語等）、アフリカ語が主要部族語をその国の公用語としている。

ケニアを例にとれば、8年間の初等教育の前半は英語、スワヒリ語の両語で、後半は英語のみで授業が行われる

（中等、大学教育は英語）。家庭では部族語（キクユ語、マサイ語等）、職場や公共の場では英語かスワヒリ語が使用される。従って、ごく普通のケニア人であれば、少なくとも公用語である英語とスワヒリ語の他、自分の部族語の三つの言語を話す。更にミドルクラス以上のケニア人は、フランス語やアラビア語を話す者も多い。このため、ケニア人から見れば、高等教育を受けた日本人の多くが英語を満足に話せないのは、極めて不思議な現象であろう。

おわりに

これまで述べてきたとおり、アフリカはそれほど暑い所ではない。野生動物

物もそれほど多くない。決して文明の遅れた野蛮な所ではない。他にも触れなければならぬ局面は多々あるが、一言で言えば、アフリカは実に多様性に富んだ所である。

しかしアフリカ関連のテレビ報道を見てみると、未だに、一局面を捉えて「アフリカらしさ」を誇張した番組が多いのは遺憾である。アフリカに携わった者の一人として、「誤った先入観や偏見をもってアフリカを見ないでいただきたい」と願わずにはいられない。この「誤った先入観と偏見は禁物」との戒めは、アフリカに止まらず、全ての物事の見方に通じるのではないかと確信する。